

# はじめに

附属長岡小学校の研究史において貫かれてきたのは、授業を見つめ子どもを見つめることにより学びの本質をとらえようとする姿勢です。

子どもの現実はいかにあるのか、授業の実際はいかにあるべきか、といったことを問い続け、それらを主体的な人間形成という立場に立って論じ、求める姿を日々の実践の中で実証的に示そうと懸命に努力を重ねてきました。

ここ数年では、幼稚園・小学校・中学校が連携し、「創造的な知性を培う」といった研究主題のもと、文部科学省指定の研究開発校として「科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」をはぐくむための幼・小・中の12年間を見通した教育課程を開発してきました。本年度はその最終年にあたります。

研究はとても実りあるものでした。その成果は、一連の紀要や報告書において記してきました。特に「科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」といった視点からは、対象をとらえ直し、見直しをもって追求し、分析的・総合的に思考することの意味と重要性、そして、そのための具体的な授業の過程や構造について、子どもの姿を通して明らかにすることができました。

本年度の研究は、このようにして身についた思考力と子どもの学ぶ意欲、基礎的・基本的な知識・技能とのかかわりに注目しています。これらが子どもの学びの中でどのように位置づけられまた相互に関係しているのか、といった点から追求し、真に生きて働く力としての学力、それを身につけるための授業の在り方を問う作業です。

研究では例えば、学習過程においては大きく3つの過程があり、それらの結びつきの中で、基礎的・基本的事項や思考力、興味関心・意欲が位置づけられ有機的に働いていること、学びを実感し、自己の在り方を問い直したり、身につけた力を活用して表現したりすることがきわめて重要であること、従って子どもにとって意味ある授業とは、こうした過程や内容を含んだものであること、などがわかってきています。

くしくも本年、中央教育審議会は、学ぶ意欲や知的好奇心を育て、「確かな学力」を育成することは学校教育の基本的な役割であり、それを育む道筋（手立て）を明らかにすることを求めています（初等中等教育分科会 教育課程分科会 審議過程報告）。本校の研究成果は、こうした現代的課題に対して直接的に答えるものにもなっています。

授業を植物にたとえるなら、基礎基本という種が、意欲という栄養に支えられ、思考力という方向性を持って伸び、自身に対する振り返りや表出といった形で花開くようなものではないでしょうか。そして、こうした実践こそが、主体的な人間を形成していくものと考えています。毎日の授業を通して、個々の子どもが自己の内外で素敵に花を咲かせることができれば…。そう願っています。どうぞ様々なご意見をお寄せください。

最後になりましたが、これまでご指導ご援助くださいました多くの皆様に、心より感謝とお礼を申し上げます。

新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校 校長

伊野義博